

Simoda Kagak 148

カゲキに行こう!

直木賞作家 志茂田 景樹

みちびき地蔵



今年初の被災地慰問は2月6、7両日の気仙沼市大島地区での読み聞かせと講演になった。気仙沼湾に浮かぶこの大島は東日本最大の有人島で、最盛期には約六、〇〇〇人、今度の震災前で三、三〇〇人が住んでいた。

津波はこの島を前後左右から襲い、読み聞かせ会場になった大島小学校の校舎や、グラウンドには島の南西部の住民多数が避難した。「津波がきたら島は三つに分断される、という言い伝えがあるんですが、その浜と…」

「よい子に読み聞かせ隊の受け入れ窓口になった『いわし』の人が横手の浜を指差して、それから低い峠状になった道を振り返って話を続けた。

「あの向こうの反対側の浜からも津波が押し寄せてあそ

が起きたことに今回の津波の大きさが窺われる。

津波が引くまでこの辺の人は生きた心地がしなかった、と『いわし』の人は苦笑した。

『イワシ』は読み聞かせや、民話をボランティアで語る会の呼称である。

島全体で津波のため三二人の死者、行方不明者を出した。せめてもの慰みは三、三〇〇人もいて、島のか

こで津波同士がぶつかり合い、一つになってこちら側は分断されました。怖かったですよ」

島の北東部でも前後から寄せた津波があと少しでぶつかり合うところだったという。三分断こそされなかったが、明治三陸津波でも昭和三陸津波でも起きなかった二分断

なりの部分が津波に蹂躪された割には犠牲者数が少なかったことだという。

大島小学校で児童、保護者を相手に読み聞かせを行い、翌日、児童館で大人対象の講演会をやり、予定は無事終了した。ほとんど帰りがけに、

「みちびき地蔵を知ってますか？」

と、訊かれた。

知りませんと首を振ると、「怖いお話が伝わっているんですが、そのみちびき地蔵も流されたんです」

と、前置きしてその話をまとめた絵本をプレゼントしてくれた。

みちびき地蔵は明日死ぬという人の魂を救済するという。ハマキチとお母さんがそのそばを通りかかると、多数の亡者が堂に吸い込まれていき、何頭かの牛馬まで吸い込まれていった。翌日、浜の潮が遠くへ引き、人々は潮干狩りを楽しんだ。そこへ大津波が押し寄せ、六一人の村人がさらわれ、牛馬も六頭が流された。以上が島に伝わるみちびき地蔵の民話で、そのとき犠牲になった人数、頭数を記した村の書付も残っていたらしい。

みちびき地蔵は三体の木製の菩薩像で、昔から香華の絶えることがなかったという。もらった絵本は気仙沼大島観光協会発行となっており、売上はみちびき地蔵の再建に当てる、と最終ページに記されている。

大島が一日も早く復興し、みちびき地蔵が再建されることを祈りたい。犠牲者数が少なかったのはみちびき地蔵が身代わりになって流されたためかもしれない。

■ 志茂田 景樹 (しもだかげき) ■
1940年静岡県伊豆生まれ。中央大学法学部卒業後、様々な職に就く。1976年『やっそこ探偵』で第27回小説現代新人賞受賞。1980年『黄色い牙』で第83回直木賞受賞。「サカキバラ症候群の子どもたち」「心療内科」等の心を問う著作のほか、「おれたち不登校。個性と心で生きてやる」、「親と子の価値観戦争」等、現代の教育を問う著作も多い。